男であつた。が一度奉職してからは全く健康を恢復したと自稱する程がッシリと肉もつき骨も太げに見ゐた。京都に出る時水澤の停車場で成功を祝した握手が、君と相見る事の最後であつたのだ。喜びに輝いた健康さうな君の顏も姿も今は皆無であり過去である。

知らずにゐた時は何も思はなんだのに、死んだと言ふ言葉が淋しいのか。

おゝ哲夫君、君の短かゝつた生涯は外見、そい凡てが不幸であつたかも知れない。然し君は、君獨り丈の知れる幸福を抱いて去つたのだ。ナテ君！その幸福丈は君の盡きぬ生命だ。

× × × × ×

私は今哲夫君の遺したものを何も持たない。只私の母に送つて呉れた君の鄕里名産の椿油が黃白く固つたまゝ瓶の底に、殘つてゐる。やがて春のぬくもりと一しよにパラピンの樣な肌を開いてぬら〳〵と解ける事だらうに。——三月廿三日夜

我が兄のこと

佐々木萬夫

永い間兄が非常に御世話を受けました山本先生から本號に關し御親切な御ことばがありましたので。頗る粗雜乍ら京都に出るまでの生活の、外に表はれた部分を、二、三心に浮んだまゝ、書いてみやうと思ひます。

兄は元來が身體が弱かつたので少さい時分から鐵劑だとか、規那煎だとかいふ强壯劑を常用して居ました、からだが弱い上に、可なりの强情で自分の考へた通りを自分もやり、他人にもやらせなければ承知しない、極端に近い程他と同化することの出來ない質だつたので、外に出て遊ぶこともあまり好まず、家の中にばかり居る方が多いやうでした、そして獨りで種々の物を細工しては喜んでゐました、不器用ではありましたが、自ら種々のものを作るといふことに可なり趣味を持つてゐたやうに思はれます、ことに、小學校を卒業して、縣の師範學校に入學する迄の一ヶ年間は、自分の居室を細工場にして殆んど終日その中に閉籠つて、模型飛行機だとか、寫眞器の暗函だとか、其他、顯微鏡、小さな電氣の機械等種々雜多なものを細工することを毎日の仕事としてゐました。

その後師範學校に入學しましたが、二年の頃風邪が基になつて消化器を害し、可なり永い間苦しめられ三年になつてからは、今度は氣管枝カタルの名の下に病む樣になりました、隨つて學校の方は欠席勝になりましたが、その頃から繪を畫くことに趣味を持つやうになりました、歸鄕靜養中にも、學校に復つてからも、天氣の具合よく、からだの具合も左程惡くない時にはよく寫生に出かけることがありました、それと同時、に空を眺めることが好きになつたやうに思はれます。

悠久な、無邊な、世事を遠くはなれ、しかも美くしい天體を、それ等の間に起る現象とは若くして病む者の心を引きつけるに充分な何物かを持つてゐます、そして、その歩みは如何に遲くとも、そ

れ等に關し知ることが出來、現に知りつゝあるといふ自覺は、比ぶるものゝない大きな慰安になつたことゝ思はれます。

歸省中、からだの具合のよい時には、折々、恒星圖や、星座表を見ては、用心深く、厚い外套を被つて外に出て星を眺めてゐました。

此のやうにして次第に、繪さ、天文さに趣味を持ち、趣味に走るやうになつたのでありませう。

そして同年の終り頃でしたか、ボール紙をまいて筒さ！た、口徑三吋位の望遠鏡を作りました、四年になつてから矢張同病のために家に來たり、學校に出たりしてゐましたが、左程病氣も惡くはなかつたので、歸鄉してゐる間に、その望遠鏡で木星の衛星觀測をやつてゐました。これがやゝ秩序だつた觀測の最初のものだつたやうであります、その頃私も矢張同じ學校に居ましたが、兄の下宿に行くと行くたびに新しい畫をも見せて呉れました。

色々問題もあつたやうでしたけれ共、結局、學校を卒業することになりました、その當時『俺はどんな山の中に行つても、どんな仕事をするやうになつても、生きてゐる間、星を眺める心算だ、』と云つてゐました。

卒業して學校を去るとき、時の校長、小林鼎氏の御紹介を得て、水澤の臨時緯度觀測所長、木村博士の御教導を得ることが出來るやうになつたのでありまして、それから又本會の幹事であられる、當時緯度變化の御研究のために水澤に御出張中であられた、山本氏に御目にかゝることが出來たのでしたが、それ以來の兩氏からの御心盡しは、親の子に對するそれにもまさる程で、病氣の療養のことから、其の學に關する、あらゆる巨細の御指導は勿論、一寸した自製器具等の微細な點の構造に關する御注意等に到るまで、至らざる所がなかつたのであります。

學校を卒業してから三年間は職をとらずに鄉里に居ました、長々の間に此の種の患者に通有な氣分に侵されて居たやうでしたが次第に元氣を恢復し、ことに醫師である伯父の家に寄遇して療養し、慈星なる大條氏の御指導の下に禊會に加入するやうになつてからは頓に活力をまして來ました、此の三年間の職務なき生活は、兄の生涯中で最も興味の多い、一面からみれば最も意義のあるものゝやうに思はれます、そして外部に表はれた行爲は生涯中最も多方面的ではなかつたらうかと思はれます。

此の時期に於ける兄のために最も重要で、且つ急なことは云ふまでもなく『病に克つこと、』でありました。

此の『克つために』、醫療、攝生に心を用ひ、畫をかき、星を眺め、或は果樹栽培に、小機械類の製作、時計修繕等にふけりなどしてゐましたが、機會があつて禊會に加入し、潛入らんとする意志の力の復活に感激して、爲さ在らも肉體の苦痛に耐へ、遂に『克つことを得』たのであります、此の克つための努力は更に兄の性格の上に多大なる影響を來し、それ以來は常に此の力に充ちてゐた、或は寧ろ、克つために努力せんとする念に充ちてゐたやうに思はれました。

生前修め得た天文に關する智識の大部分は、此の頃に於ける、木村氏、山本氏の懇篤なる御教導の賜であります。

かくて四年目にやうやく近村の小學校に奉職しましたが、約一ケ年にして、前記二氏等の御盡力により京都大學の天文臺に行くやうになりました。

其の道の智識はいかに低くとも、趣味に叶つた職業をとることの出來たことは、それのみでも兄の非常に滿足し、感謝してゐた所であります、まして同學の教授、新城氏、山本氏からの筆紙に盡せない親身たる御引立に、加ふるに遇然にも彗星を發見することが出來たので、兄としては、これに過ぎた滿足がないことだらうと思はれます。

終りに當り、生前兄のすべてに就いて言ひつくすことの出來ない、御厚情を下さいました木村博士、新城教授、山本教授の机下に、讀んで謝辭を呈し、尙、御親交を下さいました諸賢に厚く御禮を申し上げます。